

- ①暮—ナシ(平)
かゝるに—かゝる(広甲)—かゝる程に(鈴)
猶—ナシ(残・三)
とまるへき—とまりつき(古)
- ②まで—ナシ(広甲)
- ③る—るゝに(平)
を—ナシ(広甲)
とかいふと—といふと(幽・慶・宮・慶甲・愚)
—か云と(広甲)—かと(鈴)
とへは—とへと(残・三・愚)—えへは(伏)
- ④も—ナシ(黒)
家—家居(鈴)

⑤里—うら(松静)

⑥よする—よその(鈴)

⑦川—ナシ(広甲)
たとり—ナシ(林・宮)

⑧さかは—さかれ(松)—酒垣(鈴)
とゝまる—とゝまり(慶・平)

⑨也—ナシ(林)

⑩さかは—さかり(鈴)

湯坂より浦にいて、日暮かゝるに猶と

まるへき所とをしいつの大しまゝて見

わたさるゝ海つらをいつことかいふととへ

はしりたる人もなしあまの家のみそある

あまのすむその里の名もしら浪の

よするなきさに宿やからまし

まりこ川といふ河をいとくらくてたと

りわたるこよひはさかはといふ所にとゝ

まるあすはかまくらへ入へしといふ也

廿九日さかはをいてゝ浜路をはるゝと

①海のうへー海つらを(残・万・竹・三・岡)ーう
みつら(群)ーうみのうへを(松・九・古・静
池・内・鈴・扶・鷹乙・広乙・天)ー海の(広
甲)ーうみのうへに(林・学・慶・平)
ほそきー心ほそき(鈴)
②たりーたる(九)

ゆく明はなるゝ海のうへいとほそき月
出たり

③ほそさーほそき(竹・岡)
浪間ー浪ち(黒)

浦路ゆくこゝろほそさを浪間より

④しらするーすらする(黒)

いてゝしらするあり明の月

⑤なきさにーなきさ(林・伏)ーみきわ(官・平)

なきさによせかへるなみのうへに霧たちて

⑥有ー見え(松・九)
つるーぬる(黒)
つり舟ーつりふねも(松・丸)ー舟林・広甲
慶・伏
すーつ(竹)

あまた有つるつり舟見えすなりぬ

あまを舟こき行かたを見せしとや

浪に立そふうらのあさ霧

⑨都ーみやこの(松・丸)
へたゝりはてーへたて果(広甲)ーへたゝり
(静・慶・伏・鈴)
もーを(黒)

都遠くへたゝりはてぬるも猶夢の心地して

⑩はなれー別れ(松・丸)
かけもー立も(鈴)

立はなれよもうき波はかけもせし

①ならばーコノアトニ次ノヨウニアル(松九)

安嘉門院四条法名作

中院大納言置文和歌「日吉百ヶ日參籠之時日歌之内也」いとほるゝなかきいのちのつれなくてなをなからへは子はいかにせん」ふる里に千世もとまではおもはずととみのいのちをとふ人もかな

②てーナン(三)はーを(松)

のーか(鈴)そーナン(慶・伏)

④てーナン(広甲)

⑤松風ー松の風(幽・残・群・松・九・広甲・学・静・池・慶・内・扶・宮・鷹甲・鷹乙・広乙・三・天)

⑥おほつかなきーおる人かなき(伏)

はーナン(残・三)ーす(黒)

⑦ことつけーことつて(幽・九・慶・鷹甲・平)よりことつけ(鈴)

⑧申ーし(宮)ーナン(鷹乙)御ーナン(伏)

⑨ひんきーたより(残・群・万・学・竹・古・静・池・慶・内・扶・鷹乙・広乙・岡・天)ーひん(九)ー便(鈴・三)

有しーあるし(伏)ーナン(宮)

御返事ー御返し(残・群・松・万・竹・古・鈴・扶・広乙・三・岡)ー返事(広甲)

むかしの人のおなし世ならば

あつまにてすむ所は月かけのやつとそいふ

なる浦ちかき山もとにて風いとあらし

山寺のかたはらなれはのとかにすこくて浪

のをと松風たえず都の音つれはいつしか

おほつかなき程にしもうつの山にて行

あひたりし山ふしのたよりにことつけ

申たりし人の御もとよりたしかなる

ひんきにつけて有し御返事とおほし

くて

廿九

旅衣なみたをそへてうつつ山

② ひまもーひにも(鷹甲)
しくらんーしくれけん(松・九)

しくれぬひまもさそしくらん

③ ゆくりなくーかたみなるへきーナシ(鈴)
ゆくりなくー又ゆくもなく(松)ー又ゆくり
なく(九)

ゆくりなくあくかれ出しさいよひの

月やをくれぬかたみなるへき

⑤ をーナシ(広甲・学)
事はー事(平)
神無月ーなかつ月の(松・九)

都を出し事は神無月十六日なりしかは

⑥ おほしめしーおほし(松・九・伏)

いさよふ月をおほしめしわすれさりける

⑦ とーナシ(九・慶)
いとーナシ(鈴・宮)
やさしくーやさしくも(鈴)
たーナシ(鈴)

にやといとやさしくあはれにてたこの

⑧ かへりことはかりー御かへり事はかり(松・
九・学・静)ーかへり(伏)ーかへしはかり
(鈴・黒)
をそーそ(松)

かへりことはかりをそ又きこゆる

又きこゆるー聞(広甲)ー又きこゆ(静・伏・
宮・平)ーまつきこゆ(慶)ーきこゆる(黒)
⑨ ゆくりなくーいくりなく(鈴)

めくりあふ末をそたのむゆくりなく

⑩ うかれしーかゝりし(宮)

空にうかれしいさよひの月

① さきのーさき(黒)
ためのにーナン(残・群・三)ーためのにの君

(松)ーためのに君(九)
の御女のむすめ(松・九)ー御女(鷹乙)
よむーよひ(鷹甲)

② 勅撰にもたひくー入給へりーたひくーちよ
くせんにもいりたまへりし(松・九)ー勅
撰たひくーいり給へり(鷹)

③ 権ーナン(松・九・鷹乙)
きこゆる人ーきこゆ(群)ーきこゆる(伏)ー
きこゆる人の(宮)

④ 申ーま(松)ーナン(伏)
しかはーかはする(鈴)
程のーほと(鈴・黒)

⑤ なおほつかなさーおほつかなき(伏・鈴・鷹乙)
などー(池・鈴)
使ー文(幽・残・群・林・松・九・広甲・万・学・竹
・古・静・池・慶・内・鈴・扶・宮・鷹甲・鷹乙・
広乙・三・黒・岡・天・平)

⑥ はるくーとー見るくーと(古)

⑦ しくるーしる(静)
ほとー袖(松・九・静)
とーも(平)

⑧ 返しにー返事に(幽・残・学・慶・宮・黒)かへ
し(松・九・広甲・鷹乙)ー御かへり事に(鈴
・三)

⑨ おもひやれーおもへた(松・九)ーおもひ
やる(鈴)

⑩ こしーにし(三)
をーは(平)

さきの右兵衛のかみためのりの御女歌よむ

人にて勅撰にもたひくー入給へり大宮

院の権中納言ときこゆる人歌の事ゆへ

あさ夕申なれしかはにや道の程のおほ

つかなさなとをとつれ給へる使に

はるくーとおもひこそやれたひ衣

なみたしくるーほとやいかにと

返しに

おもひやれ露も時雨もひとつにて

山ち分こし袖のしつくを

①せうとの御せうと(松・九)
ためかぬ一中將ためかぬ(松・九)ためか

む(古)一□兼(麿甲)一□ハ空白

さま一やう(広甲・鈴)

②おほつかなきなど一覺束なくなど(広甲)一
おほつかなきなど(林)一おほつかなきと

と(慶宮)一思ひなさるゝと(鈴)

かき一かかきて(古)一云(鈴)

注 2行目「き」見セ消テ

③に一ナン(平)

⑤かへし一返事(黒)

此せうとのためかぬの君もおなじさまに

おほつかなき^きなとかきて

ふる郷はしくれにたちしたひ衣

雪にやいとゝさえまさるらん

かへし

旅衣うら風さえて神無月

しくるゝ雲に雪そふりそふ

しきかむもんるんのみくしけ殿ときこ

ゆるはこかの大政大臣の御女これも続後撰

より打つゝき二たひ三たひの家々

⑦雲一空(群)・学・静・慶・三
に一や(平)

⑩二たひ一二代(伏・宮)
三たひの三たひのしうにも(松・九)一三

代(伏・宮)

家々の一集の(静)

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

- ① うちきゝーうちきく(静)ーうらかき(黒)
歌ー歌の(幽・扶・鷹甲・広乙・黒)
給へるーたる(鈴)
- ② もーナン(幽・言・鷹甲)
こそはーこそ(残・群・静・三)
今はーいまも(黒)
安嘉門院ー安喜門院(伏)
- ③ かたーかたた(平)
- ④ まかり申ーまかり申す(群)ーまち申(松)
- ⑤ ーナン(群・鷹乙)
しかとーたりしかとみくしけとののは松
九ーたりしかと(学・静)ーしかとも(鈴)
- ⑥ さりーわざり(広甲)
はかりーはち(松)
いてたちー立(黒)
- ⑦ 出しにもー出しも(松・九)ー出しも(幽)
ー出しと(鷹甲)
かゝり給てーかゝりて(残・群・万・竹・古
岡)ーかゝりたまひてたよりに(松・九
静)
- ⑧ 草ー夢(伏)
さへーさへも(群)ーまで(広甲)
くれーくれて(鈴)
- ⑩ 心ほそさー心ほそき(九・静)
雪のーナン(伏)
ひまなきーひまなき(残・群・九・広甲・万・学
・竹・古・静・池・慶・内・扶・宮・鷹乙・広乙
・黒岡・天平)
などーと(静・慶・宮)ーナン(黒)

のうちきゝにも歌あまたいり給へる人

なれば御名もかくれなくこそは今は安

嘉門院に御かたとてさふらひ給ふあつ

まち思たちしあすとてまかり申のよし

に北白河とのへまいりしかとみえさせ給

はさりしかはこよひはかりのいてたちもの

さはかしくてかくとたにきこえあへす

いそき出しにも心にかゝり給てをとつれ

きこゆ草の枕ながら年さへくれぬる

心ほそさ雪のひまなきなとかきあつめて

②そーに(林)

雪ーよそ(鈴)

ゆくーつゝ(黒)

③なとーなにと(広甲)

御返しー御返事(幽・残・万・学・竹・古・池・慶

伏・鈴・扶・鷹甲・広乙・三・黒・岡・天)ー御

かへしあり(松)ー御返事あり(九)ー御返

④とーナシ(古)

心にかけまいらせーころかけまゐらせ

(残・万・竹・三・岡)ー心にかけまいらせ

⑤けふーけふは(残・群・万・竹・鷹乙・三・岡)

文ー御文(松・九・静)

⑥まつーナシ(慶・伏)

こまかにーこまやかに(学・静・慶)

⑦候にー候(伏)

はーの(松・九)ーナシ(鈴)

行幸の御うへとてーきやうかうこの御所へ

とてよのなか(松・九)ーきやうかうの御

こへとて(古)ー行幸のさふらへとて(宮)

ー行幸とて(黒)

⑨ほいなうーほいなく(松・九)ーほいなうて

(広甲)

⑩御まいり候ー御まゐり有(残・群・万・学・竹・

静・慶・内・扶・広乙・三・岡)ー御まいり(林

・広甲・古・池・伏・鷹乙・天)ー御参りなり

(鈴)

きえかへりなかむる空もかきくれて

ほとは雲井そ雪に成ゆく

なと聞えたりしをたちかへり其御

返したよりあらはと心にかけまいらせつ

るをけふしはすの廿二日文まちえて

めつらしくうれしきまつ何事もこま

かに申たく候にこよひは御かたたかへの行幸

の御うへとてまきるゝほとにておもふ計

もいかゝとほいなうこそ御旅あすとて

御まいり候ける日しもみねとのゝもみち

①に―ナシ(林・広甲・万・竹・吉・池内・鷹乙・岡・天・平)

候し―に(残・群・万・竹・扶・広乙・岡)―侍し(鈴)―し(三)

②こそ―そ(静)
事―御こと(松・九・静)
候し―か―し(幽・官・鷹甲・黒)―候し(慶)

③とも―と(池)―とそ(伏)
御―ナシ(林・広甲・伏)

④一かたに―一つかたに(群)―人またに(松・九)―一かたは(伏)
なりせば―ならすは(松・九)―なりけり(平)

⑤これ―それ(幽・残・群・松・九・万・字・竹・吉・静・池・慶・内・鈴・扶・宮・鷹甲・鷹乙・広乙・三・黒・岡・天)
候し―おしはかりの(残・群・万・竹・慶内・扶・広乙・三・岡)―をしはかり(静)―の候し(鈴)
御返事―御かへし(松・平)

⑧も―は(鈴・鷹甲)

⑨程―袖(宮)

⑩しらぬ―きかぬ(松・九)

見にとてわかき人々さそひ候し

ほとに後にこそかゝる事とも聞え候

しかなとやかくとも御たつね候はさりし

一かたに袖やぬれまし旅ころも

たつ日をきかぬうらみなりせば

さてもこれより雪に成ゆくと候し御返

事は

かきくらし雪ふる空のなかめにも

程はくも井のあはれをそしる

とあれは此たひは又たつ日をしらぬとあ

①返事―返し(残・群・松・方・古・静・扶・広乙
三岡―返り(分)
をそ―を(池)―をそ又(鈴)―そ(三)
きこゆる―きこゆ(黒・平)

る御返事はかりをそきこゆる

こゝろからなにうらむらん旅衣

②す―ぬ(黒)
にて―なる(鈴・平)

たつ日をたにもしらすかほにて

④たより―により(古)―に便(鈴)

あかつきたよりありときよて夜もすか

⑥中に―中にも(平)

らおきるて都の文ともかく中にことに

⑥哀に―夜に(鷹甲)―あわれ(黒)

へたてなく哀にたのみかはしたるあね

⑦君に―君の御かたへ(鈴)

君におさなき人々の事さまくにかき

人々―人(松)
事―ことなど(松・九)―事共(静)
さまく―に―さまく(松・九・広甲)

やる程れいの波風はけしくきこゆれば

⑩をそ―を(松・九)―とそ(黒)
付ける―つゝけゝる(鈴・宮・鷹甲・黒)―つ
けつる(松・九)

たゝ今あるまゝの事をそかき付ける

夜もすから涙もふみもかきあへす

①浪―かせ(残・群・林・松・九・万・学・竹・古・静
 慶内・扶・鷹乙・広乙・三・岡)
 おき―なき(古)
 ②ふるさとに―古郷には(残・群・林・広甲・万・
 学・竹・古・静・池・慶・伏・内・扶・鷹乙・広乙
 ・三・岡・平)―ナシ(鈴)
 注 2行目「は」見セ消テ

③おとうと―こと(官)

④礪ものなと―いそなとも(松・九)
 も―を(松・九)

⑤あつめ―ナシ(松・九)

⑥すさひ―すさみ(松・九)―住居(鈴)―すさ
 め(平)

⑧おと、い―おと、は(黒)
 かへり―返事(幽・残・群・万・学・竹・古・静
 慶内・鈴・扶・宮・鷹甲・鷹乙・広乙・三)―
 かへしあり(松)―返事あり(九)
 いと―ナシ(官)
 ⑨みれは―いそきみれは(松・九)―みれ(黒)
 あねきみ―ナシ(伏)

⑩に―も(松・九)

いそこす浪にひとりおき居て

又おなしさまにてふるさとはこひ忍ふ

おとうとのあまうへにも文たてまつる

とて礪ものなとのはしくもいさゝか

つゝみあつめて

徒にめかり塩やくすさひにも

こひしやなれしさとのあま入

程へて此おと、いふたりのかへりいと哀に

てみれはあねきみ

玉つさをみるになみたのかゝるかな

① 風―なみ(鈴)

いそこす風はきくこゝちして

1
(289)

② きこえ―いひ(松・九)

このあね君は中のいんの中將ときこえし

2

③ と―とか(幽・残・群・松・九・字・慶・鈴・宮・鷹
甲・三・異・平)―とは(扶・広乙)

人のうへなり今は三位入道とおなし世

3

④ はて、―はてし(平)

なからとをさかりはてゝおこなひたる人也

4

たる―ぬたる(幽・残・群・林・松・九・広甲・字
古・静・池・慶・内・鈴・扶・宮・鷹甲・鷹乙・
広乙・三・大)

其おとうとの君もめかりしほやくとあ

5

⑤ め―ナシ(平)

⑥ に―ナシ(松・九・伏)
つけて―つゝけて(松・九・静・鷹甲)

る返事さま―にかきつけて人こふる

6

⑦ 海―あめ(鈴・三)

たゝへて―たゝてこそ(松・九)―たえて
(竹)―たゝへは(平)

なみたの海は都にも枕のしたにたゝへ

7

⑧ やさしく―ナシ(松・九)―やさし(黒)

てなとやさしくかきて

8

もろともにめかり塩やく浦ならば

9

⑩ 中々―なにく(黒)
袖に浪は―袖のなみも(松・九)
を―な(松・九・平)

中々袖に浪はかけしを

10

- ①人―あま(黒)
安嘉門院―安喜門院(伏)
さふらひし―さふらひし人(松・丸)
つゝましく―つゝましと(鈴)
- ②つらねて―かねて(松・丸)
かきたるも―ひきつらねたるも(松・丸)―
かきたる(静)
- ③哀にも―あはれ(松)―哀に(幽・丸・鷹甲)

- ④成にけり―なりけり(鈴)
なかめ―なかめ(宮)

- ⑤たとたとしき―すゑはいと、しく(松・丸)
―たとくしき(伏・鈴・思)
谷の―深谷の(静)―たに(伏)

- ⑥とも―と(松・丸)
初音―はつねを(平)
たにも―たに(松・丸)―にも(伏)

- ⑦昔の―むかし(松・丸)
にしも―にも(伏)

- ⑧あり―ありし(松)―ナシ(林・静)
への―へ(松・丸)
- ⑩に―にも(竹・黒)
と―に(広甲)

給へりし―給し(広甲・静・黒)

この人も安嘉門院にさふらひし也つゝまし

くする事ともを思ひつらねてかきた

るもいと哀にもおかし程なく年くれて

春にも成にけりかすみこめたるなかめ

のたとくしき谷の戸はとなりなれ

とも驚の初音たにもをとつれこすお

もひなれにし春の空はしのひかたく

昔のこひしき程にしも又都のたより

ありとつけたる人あはれいの所々への

文かく中にいさよふ月と音つれ給へりし

人の御もとへ

おほるなる月はみやこの空なから

またきかさりし波のよるく

なとそこはかとなき事共をかきき

こえたりしをたしかなる所よりつた

はりて御かへりことをいたう程もへす

まち見奉る

ねられしな都の月を身にそへて

なれぬ枕の浪のよるく

権中納言のきみはまきると事なく

③よるくーよなく(群)

④なとそこはかと…浪のよるくーナシ(鷹
甲)

そこはかとなきーそこはかとなき(学)

ーそこはかとなく(鈴)

をーナシ(伏)

かきーかきて(群・学・慶)ーナシ(松・丸)

⑤なるーなり(松)

⑥かへりことをーかへしも(松)ー返事も(丸)

もーナシ(松・丸)

⑦まち見ー聞え(鈴)

本 ⑧なーよ(黒)

⑨枕ー旅(広甲)

よるくーよなく(群)

⑩はーと(伏)

事ーかた(松・丸)

なくーなくて(平)

151 校

①を―をのみ(松・九・静)―ナシ(鈴)

よみ給ふ―よむ(鈴)
此程―此程の―(幽・宮・鷹甲・黒)―このほ
とに(伏)

②したる―しをきたる(松・静)―しきをたる
(九)
とも―とも(九)―ともを(広甲)―ともを
も(半・慶)

奉る―まつる(静)
③海―浦(鈴)
ちかき―いとちかき(松・九)

おり―折々(松・九)
④なくさ―なきさ(慶・鈴・黒)
ならねは―なれは(鈴)

猶―かひ(松・九)
心ち―心を(古)

⑥忘貝―わすれかは(伏・平)

⑦くたくる―くたれる(広甲)

⑧し―き(鈴)
浦―海(鈴)
は―の(松)

⑨たる―たり(万・竹・古・静・岡)
⑩はれくもりなかめて―花くもりなかめて
(残・群・万・竹・三・岡)―はれくもりな
めそ(松・九)―春くもりなかめて(伏)
わたる―わふる(松・九)
に―も(万・竹・岡)

歌をよみ給ふ人なれば此程手ならひ

にしたる歌ともかきあつめて奉る

海ちかき所なれば貝なとひろふおり

もなくさの浜ならねは猶なき心ちし

てなとかきて

いかにしてしはしみやこを忘貝

浪のひまなく我そくたくる

しらざりし浦山風も梅かゝは

みやこにゝたる春の明ほの

はれくもりなかめてわたる浦風に

①たよふーたよふ(鈴)
夜の月ーあけほの(平)

かすみたよふ春の夜の月

②山かせー山かけ(群)ー山松(幽・松・九・静・
宮・鷹甲・黒)

あつまちの礪山かせのたえまより

③にーそ(幽・松・九・宮・鷹甲)ーは(黒)

なみさへ花のおもかけにたつ

④いてはー出し(方・竹・岡)

都人おもひもいてはあつまちの

⑤はなやーはるや(伏)ーはなは(鈴)

はなやいかにとをとつれてまし

⑥なとーなとや(九)

たーナシ(宮)

おもふーうちおもふ(松・九・静)

まゝにいそきたるーまゝにはかきたる(伏)

注 6行目「はか」見セ消テ

⑦やうーやうに(鈴)

なりしをー日比ーナシ(黒)

いそきたるつかひとてかきさすやうな
か

⑧程ーはとも(松・九・静)
返事ー返し(群・松・鈴・扶・広乙・天)

りしを又程へす返事し給へり日比の

⑨おほつかなさーおほつかなき(岡)
文ー御ふみ(松・九・静)

おほつかなさもこの文に霞晴ぬる心ち

⑩ありー侍り(群・静・慶)ーありさも(鈴)

してなとあり

①よーと(伏)

たのむそよしほひにひろふうつせ貝

1

②のーに(池・尊)

かひある浪のたちかへる世を

2

くらへ見よかすみのうちのはるの月

3

④はれぬーはれ思(慶)ーくれぬ(広乙)

はれぬこゝろはおなしなかめを

4

⑤いろーこゑ(池)

ちる花をー散花に(九)ー藤花を(広甲)ーち
る花の(万・竹・岡)

白波のいろもひとつにちる花を

5

⑥にーそ(松・九)

おもひやるさへおもかけにたつ

6

⑦忘れすはーおもひ出は(松・九)

あつまちのさくらを見ても忘れすは

7

みやこの花を人やとはまし

8

⑧すゑーすそ(扶)

わかしくしきーわなくしき(静)

やよひのすゑつかたわかしくしきわらは

9

⑩にやーに(静)

日ませにー日交(三)
成ぬーなり思(慶)ー及へり(鈴)

やみにや日ませにおこる事二たひに成

10

- ① ほれはてしほれはて(残・群・林・松・九・広
甲・方・竹・古・池・扶・鷹乙・広乙・三・岡・
天)―しほれ(宮)―なればはて(鷹甲)
- ② なから―てから(鈴)
- ③ 三たひ―二たひ(静)
なるへき―なるへき日の(松・九)―なりぬ
へき(静)
- ④ より―ナシ(平)
- ⑤ 居―ナシ(松・九)
の―ナシ(広甲)
- ⑥ 三―にて―に(平)
を―ナシ(鈴)
- ⑦ 一―にして―ひとつにて(松・九・広乙)
ほくゑきやう―ほけきやうやさき(松)―法
華経やまき(九)
- ⑧ なこり―名残も(幽・残・群・林・松・九・広甲・
万・字・竹・古・静・池・内・鈴・扶・宮・鷹甲・
鷹乙・広乙・三・黒・岡・天・平)
- ⑨ おちたるおりしも―おちたりしも(松)―お
ちたりおりしも(九)
みやこの―ナシ(鈴)
- ⑩ あれば―ナシ(平)
- ⑪ こも―ナシ(静・慶)―より(内)
- ⑫ 権―ナシ(鷹乙)
- ⑬ 旅のそら―とゝめてとかきて―ナシ(鈴)
- ⑭ にて―にや(池)
- ⑮ あやうき―あやふき(残・群)―たさきはる
まてやとあやうきに(松)―玉きはるまて
やとあやうき(九)
- ⑯ さすかに―さすか(残・群・万・竹・三・岡)
たもつ―なをたもつ(松・九)―ナシ(残・群・
万・竹・三・岡)
- ⑰ かけ―かき(広甲)
- ⑱ とゝめ―とめ(黒)
- ⑲ とゝめて―とゝめ(竹)
- ⑳ と―こそなと(松・九)

ぬあやしうほれたたたる心地しなから

三たひになるへき暁よりおき居て仏の

御まへにてこゝろを一にしてほくゑきやう

をよみつ其しるしにやなこりなく

おちたるおりしもみやこのたよりあれば

かゝる事こそなとふるさとへもつけや

るついでにれいの権中納言の御もとへ旅の

そらにてあやうきほとこのこゝろほそさも

さすかにたもつ御法のしるしにやけふま

てはかけとゝめてとかきて

①とーに(鈴)

いたつらにあまの塩やくけふりとも

たれかは見ましかせに消なは

ときこえたりしをおとろきてかへり

②をーかは(黒)
おとろきてーおとろく(広甲)
かへりことーかへし(松・鏡)

④とくし給へりーとくたまへり(松・丸)ーと
てし給へり(静・平)ーしたまへり(鈴)

こととくし給へり

⑥きえーきゝ(静)
浦ちー浦は(幽・鷹甲)

きえもせしわかの浦ちに年をへて

⑧をーも(万・竹・岡)

ひかりをそふるあまのもしほ火

⑦しるしーしるしこそ(松・丸)
てーとて(松・丸)

御経のしるしいとたうとくて

⑨たのもしーたのし(平)
とーに(松・伏)

たのもしな身にそふ友と成にけり

妙なる法の花の契りは

⑩あれーある(宮)

卯月のはしめつかたたよりあれは又おなし

① その一こそ(静・鈴・黒)
恋しさ一こひしき(静・三・函)

② て一つゝけて(松・九)

③ 世一に(松・九)
はてし一はてゝ(残・広甲・学・静・慶・三)

④ より一こそ(平)
木すゑも一木すゑは(幽・鷹甲・思)一情も
(鈴)

⑤ いまや一いや(松)

⑦ 返事一かへし(群・松・九・万・竹・古・鈴・扶・
広乙・三・岡・平)
あり一有うちす(て)られたてまつりにし(の)ち
は(松・九・静)

⑩ さて一さても(松・九)
たつね一はつね(伏)

人の御もとへこそその春夏の恋しさなと

かきて

見し世こそかはらざるらめ暮はてし

春より夏にうつる木すゑも

夏衣はやたちかへてみやこ人

いまやまつらん山郭公

其返事又あり

草も木もこそみしまゝにかはらねと

ありしにも似ぬこゝちのみして

さてほとゝきすの御たつねこそ

②二一(残・群・鈴・扶・広乙・三)
そ一は(黒)
つる一ぬる(黒)

③郭公一時鳥を(学・静・宮・静)

⑤ふるす一ふりぬ(松・九)

⑦われ一候な(残・松・九・万・竹・古・内・扶・鷹
乙・広乙)一候なる(群・学・静・慶・三)一候
我(幽・宮・黒・平)一候(鈴)
ためしと一ためしも(幽・松・九・鷹甲)一た
めしいま(宮)

⑧られて一られ(九)
文一御文(松・九・静)
こと一まことに(宮)

⑨て一ナシ(松・九)
⑩月の一月も(松・九)
すゑに一末(平)
成にけれと一なりければ(残・群・万・竹・古
慶・鈴・扶・広乙・三・岡)一成けれと(幽・林
・広甲・学・池・内・宮・鷹甲・鷹乙・黒)

人よりも心つくしてほとゝきす

たゝ二声をけふそきゝつる

さねかたの中将の五月まで郭公きかて

みちのくにより

みやこにはきゝふるすらむ時鳥

せきのこなたの身こそつられ

とかや申されたる事のわれ其ためしとお

もひいてられて此文こそことにやさしく

なとかきてをこそせ給へりさるほとに卯

月のすゑに成にけれと時鳥の初音ほの

①つていて(古)―ナシ(黒)

きくは―きけは(幽・残・群・松・九・学・鈴・宮
・麻甲・三・黒)―聞は(万・竹・古・静・池・慶
・扶・鷹乙・広乙・岡)

②やつ―やい(池)

に―には(松・九)
あまた―あまたの(静・慶)

③なと―と(幽・鈴・宮・慶甲・黒)

④忍ひねは―しのひねには(万・古・岡)―しの

ふ音は(鈴)
なる―なり(九)

⑤たかく―多く(岡)
いつか―いつる(静)

⑥おもへとも―ちつれと(松・九)―打おも

へとも(静)
かひも―かひ(学・鈴)―ひも(古)

⑦あつまち―東(池)

⑧なる―なり(鈴)
有―なり(岡)

⑨よし―みし(九)―もし(鈴)

⑩ける―けるに(鈴)

こそ―にそ(平)
しけるよと―しけるよとおもふもなか
くと(松・九)―しけるよし(平)

かにもおもひたえたり人つてにきくは

ひきのやつといふ所にあまた声なき

けるを人聞たりなといふをきゝて

忍ひねはひきのやつなるほとよきす

雲井にたかくいつかなのらん

なとひとりおもへとも其かひもなしもと

よりあつまちはみちのおくまで昔より

時鳥まれなるならひにや有けん一す

ちに又なかすはよしまれにもきく人有

けるこそ人わきしけるよと心つくし

- ① けれーけれは(松)
又けーナシ(鷹甲)
くはこくもん院ーくはとく門院(幽・残・群・松・九・鷹甲・三・黒)ー過陽門院(鈴)
新中納言ときこゆるはーナシ(平)
新中納言ーしんちうなこんの君ー(松・九
中納言(慶)
- ② ときこゆるは(中納言ーナシ(池)
はナシ(内)
- ③ 京極の中納言ー京極の権中納言(鈴)
定家ーナシ(群・静)
すずめー御むすめ(残・群・松・万・学・竹・古
静・慶・内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三・岡)
ふか草のーふか草の新中納言ときこゆるは
(平)
- ④ さきのーナシ(黒)
ちのー父(静・慶)
中納言のー中納言(広甲・伏)
- ⑤ 給へるーたまへりける(松・九)
給ひにけるーたまへりける(松)ー給ける
(伏・黒)ー給へにける(宮)
- ⑥ 奉りーナシ(鈴・尊)
つたりーつたはれ(静)
- ⑦ なりーなりけり(松・九)ーなる(静)
うきこかる、うきこかる、幽・鷹甲)
うきみこかる、残・群・松・九・万・学
竹・古・内・鈴・扶・広乙・三・岡)
- ⑧ 給へりしー給へり(九・静・伏)ーたまひし
(鈴)
- ⑨ すけのーすけ(松)
すけうとにてそーせにうとてそ(静)ーおとう
とにそ(松・九)ーせうとにて(宮)ー兄人
にて(三)
- ⑩ おはするーおはしける(群・静・慶・三)
里人ーさる人(幽・残・群・松・九・万・学・竹・
古・静・池・鷹・伏・内・鈴・扶・宮・鷹甲・鷹乙
・広乙・三・黒・岡・天・平)
にてーとて(松・九)
歌ーナシ(黒)

にうらめしけれ又くはこくもん院の新

中納言ときこゆるは京極の中納言定

家のむすめふか草のさきの齋宮と

きこえしにち々の中納言のまいらせをき

給へるまゝにて年経給ひにける此女院

は齋宮の御子にし奉り給へりしかはつた

はりてさふらひ給なりうきこかるゝ藻

かり舟なとよみ給へりし民部卿のすけ

のせうとにてそおはする里人の子にて

あやしき歌よみて人にはきかれしと

① 給しかと一たまへりしも(鈴)

あなかちにつゝみ給しかとはるかなる旅の

② そら一そらの(松・九・静・鈴)

なさに一なきに(幽・慶・宮・鷹甲・黒)
なることゝもを一なと事とも(鷹乙)一なる
こととも(黒)

そらおほつかなさにあはれなることゝも

③ つゝけて一つけつる(広甲)

をかきつゝけて

いかはかり子をおもふつるとひわかれ

ならはぬ旅のそらに鳴らん

④ 文の詞に一ふみこと葉に(松・九)一ふみの
こと葉(静)

と文の詞につゝけて歌のやうにも

⑦ 給へるも一たまへりも(鈴)

あらずかきなし給へるも人よりはなを

⑧ ならず一ならぬ(松)一ならぬやうに(九)

御かへりことは一御かへしは(松)一御かへ
りには(学)一御返事には(慶)

さりならずおほゆ御かへりことは

それゆへにとひわかれてもあしたつの

⑩ こひしき一かなしき(残・方・竹・古・静・池・
内・扶・鷹乙・広乙・三・岡・天)

子をおもふかたは猶そこひしき

①きこゆーきこゆる(字)
大納言ー大納言の(松・九・池・鈴)

草のーナシ(池)

②にもーにもつねに(松・九)

そひーひ(平)

夢にー夢にも(幽・林)

させーナシ(松・九)

もーや(鈴)

③やーは(鈴)

④てーナシ(広甲・黒)

かきつけ奉るーかきつけて奉る(幽・残・群)

万学・古池・内・鈴・扶・鷹甲・鷹乙・広乙・

三・黒・岡・天・平)

⑤なこりはーなこりを(幽・残・群・林・松・九)

万学・竹・古・静・慶・内・鈴・扶・官・鷹甲・

鷹乙・広乙・三・黒・岡)ー名残に(広甲)ー

枕に(伏)

⑦まよひーかよひ(松・九・静)ーまかひ(平)

ときこゆ其ついでに故入道大納言草

の枕にもたちそひて夢に見えさせ

給ふよしなと此人はかりや哀ともお

ほさんとてかきつけ奉る

みやこまでかたるもとをしおもひねに

しのふむかしの夢のなこりは

はかなしや旅ねの夢にまよひきて

さむれはみえぬ人のおもかけ

なとかきてたてまつりしを又あなち

にたよりたつねてかへりことし給へり

⑧かきてーかき(官・平)
しをーたりしを(松・九・静)
あなちーかち(伏)
⑩たよりたつねてー使重て(鈴)
かへりことーかへし(松)ーかへりこゑ(平)
しーナシ(静)

① 給へりしも―たまふ事も(松・九)―たまふも(静)

さしも忍ひ給へりしもおりから也けり

② 草―夢(広乙)

あつまちの草の枕はとをけれど

かたればちかきいにしへの夢

④ いく―いつこ(松・九)

床―夢(群・鏡)―ゆか(残・万・竹・古・扶・広乙・三・岡)―とこ(幽・松・慶・宮)

いくより旅ねの床にかよふらん

⑤ つる―ける(松・九)―へる(岡) 露を―露をも(慶)

思ひをきつる露をたつねて

⑥ は―ナシ(鈴)

などの給へり夏の程はあやしきまで

⑦ 音つれも―をとつれ(松・九)

おほつかなさも―おほつかなさも(九)

音つれもたえておほつかなさも一かたな

⑧ す―て(伏)

たち―たちこえて(松・九)―ナシ(鈴) 山―ナシ(鈴)

らす都のかたは志賀の浦浪たち山三

⑨ も―にも(松・九)

いと―いと(幽・鈴・鷹甲・思)―ナシ(宮・平)

井寺のさはきなときこゆるもいととお

⑩ そ―ナシ(鈴)―にそ(黒)

つかひ―たしかなるつかひ(松・九・静)

ほつかなしからうして八月二日そつかひ

1

2

3

4

5 (298)

6

7

8

9

10

- ① まちえ日比よりをきたりける人々の
(黒) よりをきたりける—とりをきける(松・九)
 —より書あつめたる(鈴)—よりならひた
 ける(平)
 人々の—ナシ(平)
- ② 文とも—御ふみとも(九)—文ともを(鈴)
 つる—つ(鈴)
- ③ 侍従の宰相の君—ししゅうの君(群)—し、
 うたぬすけの君(松・九)—侍従宰相(静)
 —侍従の宰相(宍)
 ③の歌を—の和歌を(残・群・学・静・慶三)—
 の歌たうきに(松・九)—のを(林・万・古・
 内・鷹乙・岡)—を(平)
 よみたりける—よみける(広甲)—よみたる
 (鈴・平)—よみたり(愚)
- ④ くたされたる—くたされたり(残・群三—
 黒)—ひんきすこしとてくたされたり
 (松)—ひんきすこしとてくたされたり
 (九)—便すこしとてくたされたり(静)
 —くたしたる(鈴)
- ⑤ いと—いと(松・九)
 おかしく成にけり—おとなしく成にけり
 (幽・松・九・学・静・慶・鈴・宮・鷹甲・黒・平)
 —をかしくなりまきりけり(群)
- ⑥ 十八首に—十八首(幽・残・群・学・慶・鈴・宮・
 鷹甲・尊三・黒)—廿八首(松・九)
 ぬる—つる(松・九)
- ⑦ こそあるらめ—こそはあらめ(松・九)—
 るにこそあるらめ(平)
- ⑧ とても—とての(広甲)—しても(広乙)
- ⑨ かさなる—かけなる(黒)
- ⑩ 雲—雪(三)
- ⑩ に—も(黒)
- 旅—このたひ(松・九)
 をこせ—おこし(黒)

まちえ日比よりをきたりける人々の

文ともとりあつめて見つる侍従の宰相

の君のもとより五十首の歌をよみたり

けるとてきよかきもしあへすくたされ

たる歌もいとおかしく成にけり五十首に

十八首にてんあひぬるもあやししく心のや

みのひか目こそあるらめ其中に

心のみへたてすとも旅ころも

山ちかさなるをちのしら雲

とある歌を見るに旅の空をおもひをこ

- ①にーナシ(黒)
こそいとーこそいと(幽・鈴・宮・鷹甲)ー
こそはと(残・群・九・扶・広乙・三)ーこそ
こと(平)
- ②其歌のーその(松・黒)
もしちいさくーやるーナシ(鈴)
ちいさくーちいさくて(松・九)
③かへりことーかへし(松・九)
そーナシ(万・竹・黒・岡)
- ④たくふーたかふ(松・伏・鷹乙・岡)ーたふ
(静)
- ⑤はかへるーはらへる(慶)
雲ー雪(三)
- ⑥題にてーたいにて侍従の歌に(松・九)
- ⑦かりそめのーかりそめも(伏)
よなくーよるく(黒)
- ⑧にも袖そーにそ袖も(松・九・池)ーたに袖そ
(宮)ーにも袖(黒)
露けきー露けさ(黒)
- ⑨にもーも(伏)
かへりことそーかへしを(松)ー返事を
(幽・九・鈴・宮・鷹甲・黒・平)
たるーたり(幽・松・九・宮・鷹甲・黒)ーつ(広
甲)

せてよまれたるにこそいと心をやりて

哀なれば其歌のかたはらにもしちい

さくかへりことをそかきそへてやる

恋しのふこゝろやたくふ朝夕に

ゆきてはかへるをちのしら雲

又おなし旅の題にて

かりそめの草の枕のよなくを

おもひやるにも袖そ露けき

とある所にも又かへりことをそ書そへたる

秋ふかき草の枕にわれそなく

①すてゝこしすてたりし(平)

②五十首の―五十首(学)

歌の―ナシ(松・九)

おく―中(扶・広乙)

そふ―そへ(学・慶・鈴・愚)

③おほかた歌のさまなど―大かた歌きまなど
をほめも又よむへきやうなど(松・九)
しるしつけて―書付て(鈴)

④おくに―ナシ(鈴)

昔の人々の歌―昔の人の歌(残・群・三)―む
かし人のことを(松・九)―むかしの人々
の事に(学)―むかしの人々のことを(群)

―むかしの人々の歌に(慶)―むかしの人
々の歌(鷹甲)―むかしの人々の事(愚)

⑤かと―とか(松・九)学・伏・鈴・平)
つる―いつる(松・九)

人にかはりてねこそなかるれ

これを見はいかはかりかと思ひつる

とかきつく侍従のおとうとためもり

の君のもとよりも三十首の歌を送り

てこれにてんわろからん事をこまかに

しるしたへといはれたりことしは十六そ

⑦おとうと―おとと(松)―おとうとの(愚)

⑧の君―君(九)

よりも―より(慶)

三十首―廿首(群・万・竹・古・鈴・扶・広乙・

岡)

送りに―よみたりと(鈴)

⑨これに―これも(学・慶)

てん―てんあひて(残・群・松・九・万・学・竹

古・静・池・内・鈴・扶・鷹甲・鷹乙・広乙・三・

岡・文)―てんあひ(慶)

事を―こと(松・九)―事をも(鈴)

こまかに―こまやかに(鈴)

⑩ことしは―としもことしは(松・九)―こと

し(海)

①くちなねはくちなね(松・九・静)一口(鈴)
 やさしくーやさしくも(平)

かし歌のくちなねはやさしくおほゆるも

②かへすくーかへすくも(鈴)
 いたくなんーいたし(松・九)

かへすくー心のやみとかたはらいたくなん

③こなたーこのかた(松)

これも旅の歌にはこなたを思ひてよ

④たりけりけり(松・九)ーたり(伏)
 しーナン(慶・伏)
 日記ー日なみの日記(松・九)

みたりけりと見ゆくたりし程の日記を

⑤たりしをーたりしをみて(松・九・静)

此人々のもとへつかはしたりしをよまれ

⑥たりけるなめりーたるなり(宮)

たりけるなめり

⑦猶ーけに(松・九)

立わかれふしの煙を見ても猶

⑧ほそさーほさ(竹)
 いかにー色に(三)

こゝろほそさのいかにそひけん

⑨もーにも(松・九)
 つくーて(鈴)

又これも返しをかきつく

かり初にたち別ても子をおもふ

①をーは(松・九)

おもひをふしのけふりとそみし

卅四ウ

②こまやかにーいとこまやかに(松・九・静)ー
こまかに(鷹乙・黒)
てーナシ(黒)

又権中納言の君こまやかに文かきて

③くたりーくたし(平)
しーにし(松・九)
もーナシ(九)

くたり給ひし後は歌よむ友もなくて秋

④はーナシ(鈴・平)
おもひてーおもひいて(幽・残・群・松・九・字
池・慶・鈴・扶・宮・鷹甲・広乙・三・黒)ー忍
いて(静)ーおもひ(鷹乙)
るーは(平)
をーナシ(宮)

に成てはいとーおもひてきこゆるまゝに
ひとり月をのみなかめ明してなとかきて

東路の空なつかしきかたみたに

⑦にーの(鷹甲)

しのふなみたにくもる月かけ

⑧返事ー返(九)ー歌(黒)

これもーこれよりも(九)
ふる郷ー古郷の(幽・残・群・松・九・方・字・竹
古・静・池・慶・内・鈴・扶・宮・鷹甲・鷹乙・
広乙・三・岡・天)
恋しさー恋しき(広甲・鷹乙)

此御返事これもふる郷恋しさなとか

きて

かよふらし都のほかの月見ても

① なつかしき―なつかしみ(平)
 なかめは―コノアト次ノヨウニアル(九)
 「安嘉門院四条法名作東日記」
 〔ナオコレ以下九条家本ハズベテナシ〕
 ② つもりたり―つもりたりければ(鈴)

③ 又かきつくへし―ナシ(鈴)

④ しきしまや―しきしまの(鈴三)

⑤ ひらけしはしめ―ひらけはしめし(幽・残・
 群松・方学・竹・古・静・内・鈴・扶・鷹乙・
 広乙・三・黒・岡)―ひらひはしめし(鷹甲)

⑥ 歌ときく―うたひてし(幽・残・群松・方学・
 竹・古・静・池・慶内・鈴・鷹甲・鷹乙・三・
 岡・天)

⑦ 世にも―御世の(残・群松・方学・竹・古・静・
 慶内・扶・鷹乙・広乙・三・岡)

⑧ すてられす―みちしるく(残・松・方学・古・
 静・内・三・岡)―みちしなく(群)―道しれ
 る(半学・慶)―みちしけく(鷹乙)

⑨ 情に―わさを(残・群松・方学・竹・古・静・
 慶内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三・岡)―わさに
 (池・天)

なりければ―ことのはに(残・群松・方学・
 竹・古・静・慶内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三・
 岡)―なりければ(伏)

⑩ なひくなり―なひくなり(幽・学・慶・扶・宮・
 鷹甲・広乙・三・黒・平)―あはれとて(残・
 群松・方学・竹・古・静・内・鈴・鷹乙・岡)―な
 ひくなる(伏)

四の―よろこ(黒)

そらなつかしきおなしなかめは

みやこの歌とも此のちおほくつもり

たり又かきつくへし

しきしまや やまとのくにゝ あめつちの

ひらけしはしめ むかしより 岩戸をあけて

おもしろき かくらの詞 歌ときく

されはかしこき ためしとて ひしりの世にも

すてられす 人のこゝろを たねとして

よろつの情に なりければ おに神までも

なひくなり 八嶋のほかの 四のうみ

10 9 8 7 6 5 4 (302) 3 2 1

①空ふく風もー吹風までも(学)

浪もしつかに

おさまりて

空ふく風も

1 (303)

②枝もー枝を(鈴)

やはらかに

枝もならさす

ふる雨も

2

③きみくゝのーきみたひ(黒)
みことーみかと(言・平)

時さたまれば

きみくゝの

みことのまゝに

3

④浦路のーうらはの(幽・鷹甲)ー浦ちに(広
甲)

したかひて

わかの浦路の

もしほ草

4

⑤跡おほしーあとおほく(残)ーことおほし
(鷹乙)

かきあつめたる

跡おほし

それか中にも

5

⑥つくーつきし(残・群・松・万・学・竹・古・静
池・慶・内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三・岡・天)
子にー子の(残・群・松・万・竹・古・静・池・内
扶・鷹乙・広乙・三・岡・天)

名をとめて

三代までつく

人の子に

6

⑦わきーわけ(鷹乙)
をはーさへ(残・松・万・竹・古・静・内・鈴・扶
鷹乙・広乙・三・岡・天)

おやの取わき

ゆつりてし

其まことをは

7

⑧もちーあり(残・松・万・竹・古・静・内・鈴・扶
鷹乙・広乙・三・岡・天)
いやしきーいやし(残・群・松・万・学・竹・古
静・慶・内・扶・鷹乙・広乙・三・岡)

もちなから

思へはいやしき

しなのなる

8

⑨にーや(黒)
種をーたつね(池)
まきけるーまきたる(残・群・万・竹・静・鈴
扶・宮・広乙・三・黒・岡・平)ーまける(松
古)

其はゝき木の

そのはらに

種をまきける

9

⑩とてやーとや(鈴)
つかへよーかつみよ(黒)

とかとてや

代にもつかへよ

いける世の

10 (304)

①明石―あし(岡)
の―と(池)

身をたすけよと ちきりをく すまと明石の

②谷川に―山かは(残・群・松・方・竹・古・内・
鷹乙・三・岡)―やま川に(慶)

つゝきなる ほそ川山の 谷川に

③わつかに―わかかに(鈴)

わつかに命を かけひとて つたひし水の

を―ナシ(残・群・松・方・学・竹・古・静・慶・内・
扶・鷹乙・広乙・三・岡・大)

④みなかみ―水うみ(黒)
とめ―とめ(池)
た―はや(鈴)

みなかみも せきとめられて いまはたゝ

⑤うを―いを残・群・扶・広乙)―うみ(平)
かちを―かち(鷹乙)

くかにあかれる うをのこと かちを絶たる

⑥に―てのこと(残・群・松・方・竹・古・静・慶
・内・鷹乙・三・岡)
わひはつる…よるのつる―ナシ(黒)

ふねにゝて よるかたもなく わひはつる

⑦なく―わく(黒)
都を―みやこ(残・群・松・方・竹・古・静・扶・
広乙・三・岡)

子を思ふとて よるのつる なく―都を

⑧す―ぬ(鈴・宮)

出しかと 身は数ならず かまくらの

⑨は―と(静)

代のまつりこと しけゝれは 聞えあけてし

⑩に―そ(鷹乙)

ことのはも 枝にこもりて 梅のはな

①のーに(慶)

四とせの春に

なりにけり

ゆくゑもしらぬ

1

②なか空のー半天に(広甲)ー半天の(鈴)
まかするーまかせる(伏)
はーの(慶・伏)

なか空の

風にまかする

ふるさとは

2

③てーナシ(万)

軒はもあれて

さゝかにの

いかさまにかは

3

④もーに(鈴)

なりぬらん

世々の跡ある

玉つさも

4

⑤はてはーはてゝ(静・伏)
あしからのーあしはらの(残・群・学・慶・扶・
広乙・三)

さて朽はては

あしからの

道もすたれて

5

⑥いかにせんーいかならん(残・群・松・方・学・
竹・古・静・池・慶・内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三
・岡・天)

いかにせん

これを思へは

わたくしの

6

⑦代のためー行ききかけてーナシ(平)
つらきーつよき(伏)

歎のみかは

代のためも

つらきためしと

7
(306)

⑧にーの(鈴)

なりぬへし

行ききかけて

さまゝくに

8

⑨ぬーし(残・群・松・方・学・竹・古・静・慶・内・
鈴・扶・鷹乙・広乙・三・岡)

かき残されぬ

ふてのあと

かへすゝも

9

⑩いふ人あらはーおもはましかは(残・群・松・
万・竹・古・静・内・鈴・鷹乙・三・岡)

いつはりど

いふ人あらは

ことほりを

10

① たゝすの：かけてとへーやよやいさゝかか
 けてとへたゝすののゆふしてに(平)
 たゝす(紀)(学)
 森(林)(古)―松(里)
 ② あさは跡なく―あさはかとなく(群)―麻の
 あとなく(三)

④ わすれす：ことも―ナシ(鈴)
 ゆかめることも―ゆかめる事を(残学三)
 ―ゆへあることを(松・方・竹・古・静・内・
 鷹乙・岡)
 たれか―たれゝの(慶)
 ⑥ へき―へきよのためもつらきためしとなり
 ぬへし行さきかけて(平)

⑥ きけは―聞は(残・松・広甲・方・古・鈴・扶・鷹
 乙・広乙・愚)
 ⑦ 蓬―よりき(松・古)―ゑもき(伏)―よのな
 き(平)
 かこち―かたり(伏)
 ける―てし(残・群・松・方・学・竹・古・静・慶・
 内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三・岡)
 人に―人の(残・群・松・方・竹・古・静・内・鈴・
 扶・鷹乙・広乙・三・岡)
 ⑧ けり―ける(松・学・古・内・鷹乙)
 にて―とて(残・群・松・方・竹・古・静・内・鷹
 乙・三・岡)

⑩ に―を(三)

たゝすの森の ゆふしてに やよやいさゝか

かけてとへ みた리카はしき すゑの世に

あさは跡なく なりぬとか いさめ置しを

わすれすは ゆかめることも 又たれか

引なをすへき とはかりに 身をかへりみす

たのむそよ その世をきけは さてもさは

のこる蓬と かこちける 人に情も

かゝりけり おなしはりまの さかひにて

ひとつなかれを くみしかは 野中の清水

よとむとも もとのこゝろに まかせつゝ

- ①なく―なき(残・群・松・方・竹・古・静・内・扶・鷹乙・広乙・三岡)―なは(平) わかかたへ―みつくきの(残・群・松・方・竹・古・静・内・扶・鷹乙・広乙・三岡) かきくたされは―あとさへあらは(残・群・松・方・竹・古・静・内・扶・鷹乙・広乙・三岡)
- ②いと、又―いと、しく(残・松・方・竹・古・静・慶内・鈴・鷹乙・三岡) つるか―つる(平)
- ③さし―た(平) よそ―世の(残・群・松・方・竹・古・静・内・鈴・扶鷹乙・広乙・三岡・天)―よに(広甲・林・伏・宮・平)―よを(慶)―世は(黒)
- 注 3行目「に」見セ消テ
- ④なをもさかへん―なをかへさむ(伏)―なをもつかへん(平)
- ⑤を―は(黒)
- ⑥つる―ぬる(静)―ける(鈴・黒)
- ⑦ける―てし(鈴) といふ―なといふ(黒) の―ナシ(松)
- ⑧皇太后宮―皇太宮(静) 俊成の―しゆんぜいの脚の(残・群・松・方・竹・古・内・扶・鷹乙・広乙・岡)―俊成卿の(学・静・池・鈴・三・平)―俊成卿(慶) むすめ―御むすめ(残・群・松・方・竹・古・静・池・慶・内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三岡・天)
- ⑨にて―とて(残・群・松・方・学・竹・古・静・慶・内・扶・鷹乙・広乙・三岡・天) こしへ―こしえ(鈴)
- ⑩しられける―られし(黒) 地頭の―ナシ(群・松・方・竹・古・静・内・鷹乙・岡)

とゝこほりなく わかかたへ かきくたされは
いとゝ又 つるか岡への あさ日かけ
八千代のひかり さしそへて あきらけきよにそ
なをもさかへん
なかくれとあさ夕いのる君か世を
やまとことはにけふそのへつる
残るよもきとかこちけるといふ所のうら
かきに皇太后宮大夫俊成のむすめ父の
ゆつりにてはりまの国こしへのしやうと
いふ所をつたへしられけるを地頭のさまた

- ① おほく候けれは―おほくて(残・群・松・方・竹・古・内・鷹乙・三・岡・天)―多く候へけれは(広甲)―おほく候けれ(伏)―ナシ(静)―おほく(鈴)―おほくしるるけれは(扶・広乙)―多けれは(黒)
- 昔―ナシ(群・学・静・慶)
- むさし―ナシ(松)
- 前司殿―せんし(残・群・松・方・竹・古・静・内・扶・鷹乙・広乙・三・岡)―前せんし(池・天)―けんしとの(宮)―せんそ(黒)
- ② 御―ナシ(残・群・松・方・竹・古・静・内・鈴・扶・鷹乙・広乙・三・岡)
- ③ 文に―うた(残・群・松・方・竹・古・池・内・扶・鷹乙・広乙・三・岡・天)―歌は(静)―文(宮)
- 新勅撰に―新勅撰にも(残・群・松・方・竹・古・静・池・慶・内・扶・鷹乙・広乙・三・岡・天)
- て候―侍と(残・群・三)―て(松・方・竹・古・内・鷹乙・岡)―侍ると(静)
- ④ よもき―よき(慶)
- 御―ナシ(残・群・学・慶・三)
- て―ナシ(黒)
- ける―候ける(幽・林・広甲・宮・鷹甲・黒・平)
- 歌―御歌(黒)
- ⑤ 数―みを(残・群・三)
- しらは―ならば(伏・黒)
- ⑥ よもきか―よもき(松・古)―よもきの(静)
- かすを―陰を(学)―かこと(慶)―かことを(内・鷹乙)―末を(鈴)―するも(黒)
- ⑦ て候―ナシ(残・群・松・方・竹・古・静・内・扶・鷹乙・広乙・三・岡・天)
- ⑧ 地頭の―ナシ(静・内・鷹乙)―うちたうの(平)
- みな―ナシ(宮)
- ⑨ て候けり―けり(群・静)―候けり(広甲)―て候ける(学・慶)―さふらひてけり(池・天)―てけり(内・鷹乙)―ける(鈴)
- 野中―なか(池)

けおほく候けれは昔むさしの前司殿へ

ことなる御せせうにはあらてまいらせら

れける文に新勅撰に入て候やらん心

のまゝのよもきのみしてといふ御歌を

かこちて申されける歌

君ひとり跡なきあさの数しらは

のこるよもきかかすをことはれ

とよまれて候けれはひやうてうにもをよ

はず廿一ヶ条の地頭のひほうをみなとゝ

められて候けり其後野中のし水を

②のありかほ―をしりかほ(静)

③たに―けに(松・古)

④て候も―たるも(残・群・松・方竹・古・静・池

・内・扶・鷹乙・広乙・三岡・天)―候も(広

甲)―て候けり(幽・鷹甲)

その―其後(幽・鷹甲)

こしへ―こしえ(鈴)

しやうへ―庄に(愚)

⑤ける―ける時の(幽・残・群・学・静・慶・鷹甲・

三)

歌にて候―歌にて(幽・池・内・鷹甲・鷹乙・天

・平)―うたなり(静)―にて候(伏愚)

新勅撰に入て候―新勅撰に入て侍し(残・松

・方・竹・古・池・内・扶・鷹乙・広乙・三岡・

天)―ナシ(群)―新勅撰にも入り侍り

(静)―新勅撰にもいりて候(慶)―新勅撰

にも入て侍し(鈴)―新勅撰に入て候なり

(愚)

⑦永仁六年三月一日書之―ナシ(群・学・静

・伏扶・広乙・愚)―永仁六年三月一日書之

阿公(管)

すくとて

わすられぬもとの心のありかほに

野中の清水影をたに見し

とよまれて候もそのこしへのしやうへ

くたられける歌にて候新勅撰に入て候

永仁六年三月一日書之

此道之記始而一覽之次則借請書寫訖

是所雇兼如法師之筆也遂勘校之後以

他本重而讀合之者也

慶長第三曆孟冬廿九日

幽齋叟玄旨(花押)

- ①此―右(学・静)
あぶつぼう―阿仏尼(三)―阿仏(黒)
人―ナン(学・慶)
定家―定家卿(学・静・慶)
息―よめ(幽・林・松・広甲・学・古・静・池・慶・
伏内・鈴・鷹甲・鷹乙・黒・天)
為家―為家卿(学・静)
室なり―御前にて候(幽・林・松・古・伏内・
鈴・鷹甲・天)―御せんにて(広甲・池)―御
前也(黒)
- ②ましく候―おはしけり(学・静・慶)
- ③しやう―江(鈴)
おかれ候―をかれし(幽・黒)―えられし(学
・静・慶)
- ④たふく―たうほく(広甲)
に―たるに(群・学・静・慶)
て―ナン(静・慶)
候―せられしと也(学・静)―せられし其
(慶)

(附)

底本には、次の「此あぶつぼうと申人は……」以下の文はないので、残月抄本を示して、それと他本との校異を示す。但し左記の本は、以下の本文をもたない。

九条家旧蔵本・扶桑拾葉集所収本・宮内庁書陵部蔵本「いさよひ日記」・尊経閣文庫蔵本・広島大学蔵乙本・平瀬本

此あぶつぼうと申人は 定家の息為家の室なり
 きんだち五人ましく候 はりまの国ほ
 そ川のしやうを為家よりゆづりおかれ候を
 為氏たふくによりてあふりやう候 そしやう

4 3 2 1

⑤にーナシ(静・慶)

かまくらー兩人ともにーナシ(鷹甲)

くだられー阿仏房下られ(静)ー下向(黒)

候ーし(幽・静・池・慶)ーける(学)ー候し(伏)ーの(黒)

時のー時(慶)

の道の日記にて候ー道すから心うかひし

言の葉の日記にて待也(学)ー道すから心

にうかみしこと葉の日記にて待るとなり

(静)ーの道の日記なり(黒)

⑥為氏も：せられしーナシ(慶)

ちんぢやうの：せられしーもろとも在鎌

倉にて待りしかとも(静)

にーナシ(林・伏・鈴)

⑦死去せられしー身まかられしなり(黒)

⑧られしーられし也(幽・林・広甲・学・伏・鈴

鷹甲)

そしよは：候しとぞーナシ(黒)

られず候しとぞーられ侍らざりしとかや

(学・静・慶)ーられず候ひしとかや(群)ー

られず候也(幽・林・松・広甲・古・池・伏・内

鷹甲・鷹乙・天)

⑨しとぞーナシ(鈴)

申ー申せし(黒)

⑩人なりもこの阿仏房のこと(学)ーナシ

(静)ーは(慶)ー人と也(伏)

為相ー為相脚(学)

なりー阿仏房の事なり(静)ー此安仏房の事

にて候(慶)

のために かまくらへくだられ候時の 道の

日記にて候 為氏もちんぢやうのために か

まくらへ下向 兩人ともにかまくらにて死去

せられし そしよは為氏のかたへはつけら

れず候しとぞ あぶつは安嘉門院の四条と申

人なり 為相のはゝなり